

新連載

国語学習を情報教育の視点でとらえる①
教科書に埋め込まれた情報教育の要素

金沢大学教育学部
教育実践総合センター助教授
中川 ひとし

国語学習における、情報教育のあり方が問われています。今回から、国語と情報教育の関係を明確にし、授業に役立つ事例を紹介していきます。第一回は、金沢大学教育学部教育実践総合センター助教授の中川一史さんにお話を伺いました。



中川 一史（なががわ ひとし）
一九五九年 北海道生まれ。金沢大学
教育学部教育実践総合センター助教授。
主な著書に『教室と子どもたちとイン
ターネット』（あゆみ出版）『ネットワ
ークと教育』（東洋館出版社）

国語教科書には以前から情報教育的な要素が盛り込まれていましたが、最近はその傾向が顕著になってきていると思うんです。今の教科書でいえば、「体験したことを分かりやすく伝えよう」（五年上）、「伝え方を選んで、ニュースを発信しよう」（五年下）、「伝えたい『何か』を見つけよう」（六年下）などの教材で扱われる内容は、情報教育そのものです。これら以外にも、実はたくさん教材に情報教育的な要素が盛り込まれています。その背景には、新学習指導要領において「伝え合う力」の育成が重視され、「話すこと・聞くこと」「書くこと」という言語活動が注目されてきたことがあるのではないかと、と思います。

「体験したことを分かりやすく伝えよう」という五年生の教材を例にとると、まず、学校生活について書く活動があります。ここでの学習のねらいが、「書く力」をつけるだけならば、要点を押さえてわかりやすく文章を構成できることを目標に授業を進めればよいでしょう。しかし、書いたものを校内の四年生に向けて報告することが求められると、状況は変わってきます。たとえ文章としてはよくても、そのままでは相手に伝わらない場合があるからです。そうしたときは、聞き手を意識して表現を簡単にしたり、スピーチのための原稿に直したり、説明のための実物を用意したりするなど、伝え方を工夫しなければいけません。このような国語の学習は、同時に情報教育の学習でもあるのです。つまり、

情報教育の観点から考えても、国語教育の「話すこと・聞くこと」「書くこと」の力の育成は、あらためて重要であることに気づかされると思うんです。

しかし、わたしが現場を視察させていただくと、そのクロスする部分が非常に曖昧なまま、授業が行われているように感じます。だからこそ、国語教科書に埋め込まれた情報教育的なねらいをクリアにしていきたいと、「国語と情報教育研究プロジェクト」を発足させました。

そもそも、情報教育は「情報活用能力をつけること」で、三本の柱から成り立っています。一つ目は情報活用の実践力、二つ目は情報の科学的な理解、三つ目は情報社会に参加する態度、モラルです。国語学習といえども、情報活用能力が深いのが、一つ目の「情報活用の実践力」だと思います。わたしはそれを、「課題をつかんで、調べて、まとめて、伝え合う力、さらにそれを生かして発展させる力」という言い方をしています。このプロジェクトでは、その「調べる」「まとめる」「伝え合う」の観点から、一つ一つの教材を見つめ直して、子どもにつけさせたい力を明確にしたうえで、実際の授業をどのように構築していけばいいのか、ということを検討しています。

その際、特に教材と教材の「つながり」を重視しています。一つは、同じ低学年という段階において、同じような目標で学習する教材にはどのようなものがあり、どのように関連するのか、という「横のつながり」です。もう一つは、同じ活動が中学年、高学年へ発展していくことを想定して、低学年では、その前段としてどういう力をつけなければいけないのか、という「縦のつながり」です。

「国語と情報教育研究プロジェクト」では、この「縦と横のつながり」を意識して、それぞれの教材の実践事例を研究しています。次回から連載されるわたしたちの実践事例を読んでもいただければ、情報教育という側面からも国語学習を深めていただけたらと思っています。（談）

※「国語と情報教育研究プロジェクト」の実践事例は、別冊指導書『情報活用力を育てる実践事例集』に掲載されています。